



新撰
明治
歲時
記
下

中村俊定文庫
文庫 18
919
3





新選 俳諧 明治歲時記茶草卷之下

東京 小築庵春湖 閱

全 香楠居幹雄 編

全 佳峯園等裁 校

大阪 黄華庵南齡 校

發句切字之事

切字の發句に限るとは、事、其、何、は、す、秋、
又、孝、平、活、も、意、之、切、續、き、何、り、て、録、り、活、し、
よ、く、備、せ、ら、れ、る、之、の、通、せ、さ、ら、い、勿、論、な、れ、と、後、
句、に、ま、し、て、句、を、切、る、變、な、な、ま、は、分、け、上、乃、句、
め、さ、た、る、物、を、兼、て、全、情、を、念、め、る、能、を、以、故、
と、視、る、も、天、亦、表、波、に、大、事、な、り、と、い、ひ、又、切、字、
と、い、ふ、を、切、る、事、は、大、事、な、り、と、言、ふ、り、切、續、ハ、
秋、と、の、け、ら、る、事、は、い、へ、ん、と、も、之、十、一、又、亦、此、扱、
ひ、と、十、七、字、の、扱、ひ、を、極、極、な、り、め、る、を、ね、る、は、
あ、ま、い、ん、を、用、ひ、て、切、る、事、な、り、切、字、ハ、○、山、落、木、
て、何、や、ゆ、う、童、州、○、子、規、啼、く、飛、を、以、其、の、

切字ノ部

○

時あるも	解れ枝枝のき	然雷
木隠れて鳥も	ぬきさ	百谷
むら根の志	もく	依友
香暗て	ふも	梅好
くらまて	わく	安石
とんやう	れは	其好
もと	なり	梅者
ま	つ	言游
あ	て	三雅
掛	縮	旌風
眼	つ	轉月
乳	あ	池月
枝	ま	毛束
落	れ	抱玉
ふ	る	松葉
取	つ	一理

相と	ひ	つ	は	ま	つ	枝	の	夕	三甫
別	も	も	も	も	も	も	も	も	英種
止	む	を	は	あ	る	時	の	は	伸樹
来	る	風	も	牡	母	は	清	白	治兄
め	と	り	あ	る	な	あ	ま	ま	茂翠
三	二	ッ	鉢	本	れ	の	の	花	来芝
以	て	ぬ	れ	十	句	あ	る	を	如者
時	あ	り	時	あ	る	方	の	月	萱徑
松	果	て	つ	ら	ら	ら	ら	ら	支英
船	と	る	て	渡	り	つ	き	一	静湖
隆	う	き	ま	ま	ま	ま	ま	ま	森者
除	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	又友

やの部

明り	や	か	く	を	紙	考	左磐
あ	ま	ま	ま	ま	ま	ま	市井

春風やあろく破の鳥り乃 遊古
 管や羽衣あてまて人のきく 杵杵
 野の葉や物りまきれぬ雉の聲 又燈
 ものともぬさしや常梅の花 葉而
 梅咲や片枝を物離る朽ちる 板居
 虫咲けの人もそをさつとて春 羨免
 蔭の戸や板を垂まき 月杵
 二人ともそこれぬさしや杜あ 糸湖
 をとよとよとぬまきさや時鳥 湖あ
 ち切やそとをなこれの水の音 柳井
 干てある海月白や夕曇り 左物村
 日く細くまらやまきの涙声 大津
 人のぬぬ理をさや管も移る 稻妻
 むく起や朽ともしと見る福寿科 志喜野
 秋風や一際白き波 既 一理弄
 一日や板のたふさく起まつと ぬ板

吹交りんしきりや秋の風 志了
 末秋や杖もつ僧の姿あまも 志石
 春風や烟をまうり江障り物 志高
 扇啼や暮さす神の枯尾花 鳥明
 始の波まやふちりし花 又起
 物空を吹しやもあれふさし 勇起
 落葉の音や月さけは秋夜 志巴
 改りてや看まてむとこり 景文
 時多や松の夕日と交なうら 景旭
 本枯や洞もなふさ枯のまら 志
 夕他や夏もあまきむ花鏡 初所
 花の樹のんとけくや海をむ 卯分
 武花野のふしや本本の枯面 志哉
 草花戸や別後のやうに熊勢 柳壺
 永き日や一ツ花きこく塔のあり 花野西
 一日や猿のひきも揺うつく 常窠

野をこしき花のほや女は花 三九
 落てしる月此わらみ相つる 可糸
 光てたまともうや風の出 如雷
 せひらりし仰 物月也甚の上 車志
 明月也下夜もきけし切の夜 素山
 ひとをりして夜入るを林の海 東成
 物空や人よるのつよき 重難
 相畑や一本経まで拂ぬる 鏡水
 手作の本根をけりや青藤 白流
 風またたけのきや松の林 一正
 珍勝也秋深き時乃忘事 重難
 野のあまの松も落のき 誠在
 松の露巾の畑や夕乃月 一測
 階雪や禁せらるる物の風呂 重難
 初とつらうちや冬を二折き 松園
 青きまは庭の少年也初時 松泉

花のせや花まのり本戸此 望老
 極やこしハハのぬ鏡考物 尚難
 まくやもまきぬりや初極 文凡
 蟹け子も遊ふや本下書 良恭
 子孫やまはれぬ物のを 急博
 立る種や落る風乃まらき 唯一
 竹のあやんしりき音なり 里言
 切またれり鼓のこや初か子 歩山
 を山を離き一やや時言 湖水
 ちとちれつるあやなや松柳 志左
 菟川や言ぬ内り 量花 梅良
 弟郎と法や書ともしぬ物 白左
 立り種もともや夜後のきを 另裁
 此れ者も思ふや風もくさる時 竹左
 松書此消くあうりや娘のを 三非
 秋風やうりはま 陸心 士云

蛸塞のりや折もくく	秋九
常や谷のうきと縮流	松雨
あ水とくむやあくぬゆるり	雨洗
との山とくまぬひきき	暁又
大日枝や嵐の下のき此凡	茶園
下草も落多仙やうめ此世	十洲
吟詠やわが落まてあて月流	花曉
山のけやそを雀一とま此空	来く
花垣此彩やあふりあ初曉	鹿の子
承きりやあふり下りて初あひ	湖舟
川ききやあ此落つるぬ草	利貞
松此世もあ旭の忘月あ石	醒月
楓さくや隣とくも村あうひ	雪燧
山吹やあうきをきき候とく	養賢
古島やあ初あひあ人のあ	素水
物事此世もあくくく	一知

初雪やまつひとく	山月
埋火やあくく	乙釣
木枯乃あくく	忠玉
松風冬日毎れ友平冬	政宗
夕なとれく	盛月
岩川やあ落まてあ初	滋月
よとくりあ	あ煉
水音やああ	露松
けく	雨吟



つゆとあ	浪足
二羽あ	菊成
あ	有流
梅向	一聖
あ	如風
月あ	十曉

知る物と思ふいさうし落のむ 花雄
 月影いとめてかきたし落し水 糸簾
 物影も嬌し又ささ又蒼む 三三雅
 笑顔さうけうて海し後の雛 西条
 月乃介照るを 唐の林 而系
 林よりや剝露のあしと水 可喃
 寐しつるあま彩らうし一の芽 一芽
 そとそをれそ海まきし芦の形 明らぬ
 魯阿のまきしふと初時ぬ 葉風
 一布子まこめてみこしゆりむ 古堂在
 傘あしく高き香らし門の口 雲一
 めそれささうりてもす柳を花 松尖
 めそれぬしそん地す教し香 花巻
 道通と玉味暗もす麻の形 舟遊

もれ

水念のなをまはる壺と無涯地 俄友

ちま子けりま春今りもなす白牡丹 一垂
 芽柳命魚のうくくも影もなす 竹音

ト

そのふななく供まを冬らし 長あ香 それ
 涼風の味を志ましまし 水鏡守 全

なうりたり

初爰を氣のまゆもなうりたり 梅葉
 雲閉て扇の風もなうりたり 芦夕
 相一そふ月日と候もなうりたり 一山
 香を此流曲りしと道れなうりたり 其好

たり

子乙女此は美六花彩をこつとる 李師
 春乃月水動うとほ梅りたり 鈴成
 卯の夜へさうれはさうり花の川 梅友
 旅の命清め結ひて色さうり 治兄
 眼の歌を種てさうり時香 經丈

木や草花の咲きて時多かり
言はれぬをくそ昔昔求めたり
夕陽照る花をよきと定めたり

あり

定香
梅山
相亭

暗ありま人の影あり故物な
よあふり又酒乃多あり秋極
清水よく空や森あり耕地あり
つるつるも葉もきり秋乃風
湖を渡る人あり吾れとま
抱これ八門掃てありと静の秋

をり

菊之
吾之
抱玉
空一
秀秀
抱法

去来より多うけたり鴉の巢
元山もまきしてわづり秋乃月
禁令よなりて出来たり故昔権

をや

蓬萊よすもやワセの袖たより

もせぬ

らんらんらんらんらんらんらん

らんらん

や

吹て来る木葉やととれ時多ら

松石

らん

四條のうらむりやらんらん
持て居れ若やさむらん子規

抱法
守心

こそ

ひと風今こそおれみとてなれ
そよよと秋こそとんとね子規
月のよきそよよとては秋は秋
あつきのきゆとてよれ冬は汁
をいぢやはなるとは秋あまはそ

一陽
三三
豊的
左終
長年

心

未だつとて秋連り言乃水

秀竹

又

うらみもつとて秋は

半校

そよよと風なき白ひくきこのむ 彦雄
在ぬとつく思ふぬ夜之暮立候 月夜

切字の表
あはれ

涌て出るよ水なき波を〜 一理在
と聲を〜 程言り書乃書 百良
梅見とと友と人よあつて此方 来水
夢の島ととと中よ数松葉 智杖
よ六の條ととりめて書此函 菊下
追もれても打きても唯飯の塊 三き雄
本蔭やととけてあつてきよの月 忠
昼此言と眼もつけぬと月の雲 万葉集
海海とととあつておちる柳 林のあ
ふけとととるもたつととと 豊的
時なきのぬととと〜 完臨
林此言とととと月の時言 玉映め
静夜

年乃ぬ

心うつ先へ進みぬころも〜 菊之
色〜 中此流ぬ梅柳 志水
常々老ぬ若根の五月多 万麻
生と〜 して静なりぬと月の 月とあ
と〜 又出ぬ言りなりぬ静り候 吾我
物〜 助と風乃〜 たりぬ海と山 静夜
下知
古井人おとれ。梅と風乃非 其お
ひ〜 のや〜 とも此能言り静り 貞定
舞も〜 人。嫁入の後のお 依松

す

ふりあ〜 くれ〜 くら〜 庄河 有松
落〜 け〜 なる〜 風高 松
一孝の地もも落さ〜 初鳥 浪見

乃そのもく降もくはまきとる也 極佳
月まふもふまふ 細代古 新高
時一里を 鳴もあはははの略 亦云

まー

求めたる仮名をかますむあはむ 李壠
葉標もあらうはまき 茅野山 信田

ーあ

まのれを足はまき 柳の 桂重

連句之部

歌仙

手くよ花の足やうは替りたり 士朗
まきまきまきちを控る芽花 成美
紗子おれ物木多のまき風り みる夫
破まきまき物乃まきまきまき 朗
ふはまきまき月のまきまきまき 美

本城くまきまきまき時あま 夫

言ゆくは射山あままきまき 朗

まきまきまきまきまきまきまき 美

惜まれまきまきまきまきまきまき 夫

破まきまきまきまきまきまきまき 朗

破まきまきまきまきまきまきまき 美

ほのめりたるまきまきまきまき 夫

一折ハ山耐るまきまきまきまき 朗

乞今まきまきまきまきまきまき 美

誰やらのまきまきまきまきまきまき 夫

子東北まきまきまきまきまきまき 朗

何まきまきまきまきまきまきまき 美

まのまきまきまきまきまきまきまき 夫

のつわりとまきまきまきまきまきまき 朗

まきまきまきまきまきまきまきまき 美
まきまきまきまきまきまきまきまき 夫

卯くくわきれ風を帰路 馬
 手引くくろき肥より 馬
 杖持る路より大なる夜に振 馬
 けき出りよりせし新賣 馬
 なまめくぬくくをうき載せ 馬
 乳の黒きを隠す女見 馬
 二の酒も人のこみあや言れ下 馬
 砂をふり立をふれあこ 馬
 片をよきとれ強る登れ月 馬
 松梅の口は指くくあく 馬
 瓦此れ肩をふれ柳海里 馬
 葉積れま湯の口を待 馬
 一物も酒の夜れまめくく 馬
 左の方くく笑ふ山く 馬
 藪入の翁おもふせと矢橋舟 全
 さめくくやうく海に後立 馬

長くくくの中 医者此物治 馬
 日も振まはくくん合意む 馬
 折方も替りたそくくむつく 馬
 赤き此物とためくく出 馬
 産ひくき薬田を園前取れ 馬
 ちやまをたりもくくぬ銀者 馬
 つもくて人まなれく山の手 馬
 控ひくくま遠く沸し温泉 馬
 挨拶も高垣くく此月の空 馬
 甘竹の末く月一ッ漏 馬
 井市此人敷座ひもくくま 馬
 地帯此怖くく今ままらぬ 馬
 叱りくも痛めくくはくく見 馬
 少一の嘆まはくく眠まぬ 馬
 膝を撫くく衣を袖まうき 馬
 足もくくまはくく如月のあ 馬

飯依乃瓦も月も落付亭
 山 痛ぬおちり犯す重冷
 石 極道て飯不の原も念忘
 山 鳥城まよこれ一桶の水步
 山 後摩香此勅短くまよこれの花
 山 まよひ女丁まよまよ此中
 山

半歌仙

あま経子幹を打ても梅の花
 抱依
 東風子曇里れとまよ梅合
 相堂
 塩此のまよまよ一茶漬より
 月底
 舞宣して過る大工存也
 依
 月よて梅まよまよまよひやくと
 老
 まよまよ際乃ひまよねね
 底
 洗まよまよぬまよねね乃暗く
 依
 屏風乃うちまよまよねね
 老
 手まよまよてあま経子の川
 山

とんご時多し時作多橋
 依
 道此まよ湯まよ此所此吹のり
 老
 入りの思て城乃まよまよ
 依
 けした詠まよまよ惜まよ月此秋
 依
 鯉乃初春まよまよまよまよ
 老
 春て起て味ひのまよまよ時多
 依
 まよまよけて船乃まよまよねね
 依
 美まよまよまよまよまよまよまよ
 老
 響まよまよまよまよまよまよ
 依

半歌仙

川口や西側まよまよまよまよ
 而依
 今朝まよまよまよまよまよ
 山
 より付此まよまよまよまよ
 依
 雲まよまよまよまよまよ
 山
 吾月此まよまよまよまよ
 津
 あまよまよまよまよまよ
 山

蛇祿の尻も志もくむき音平 后
 菊の葉のけりもつゝあ穂節 津
 とし中此やまをくも板もき 山
 十九の尻此もくも大子 后
 と物履もは感此冷つと油足 津
 鶴とひとりの音あ鴨子 山
 志んまゆもなきぬ位よちる柳 后
 二書たそくつも春科 津
 小便も裸て懸て月をさる 山
 おれり前の耐な〜つと 后
 潮風もなきて様もぬと登 津
 もくも根まこれつと特 山

半歌仙

昨日今日初つて相此〜音平 由 登
 月もあやむ垣のあ〜き 白 起
 酒梅味香つとくもほせ付て 丁 知

袋の中へつくるもお 登
 夏向もあまな〜あ穂節 后 起
 鳴よりま〜あ穂節 后 起
 土も〜あ本れと海もあ事下 登
 云も〜あなひと候も傍らに 起
 隊も〜あ折も〜あ結もあて 后
 乳籠も〜あも〜あ運もあ此子 登
 濃柿も〜あつと〜あ冬もあゆり 起
 見も〜あ〜あ折もあ〜あ〜あぬ 后
 乙漢も〜あ月もあ渡瀬の〜あ〜あし 登
 夏居も〜あや〜あ〜あ〜あ〜あ 登
 新踏此も〜あ四もあ結もあ〜あ〜あ 登
 谷〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 登
 板の石も〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 起
 拾も〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 后

半歌仙

竹煙てよと愛此みまたり 肩山
 梅植園のくりそめれ垣 悠
 鳥絨ひとく言句用言も秘て 山
 ざんぶり水まつける柳をみ 悠
 吉丸と申分れ詠まゆる月 山
 めつらと冷る榻の所 悠
 出舞ももちきれてそれ柳の 山
 何まなもやいら余光干 加織 悠
 三千と懸てもまをいらぬ歌 山
 あこのい夜と園の見徳一 悠
 風よけの戸をそくけし儂曲突 山
 やうて樽本も流を舞門 悠
 門宿のそけしお知れ日月まで 山
 露と控ふ柳までゆく 悠
 暮つる静家のの志さまじし柳里 山
 砂濤し さねしつはまぬあ 悠

半歌仙

花あま見むれまむらさきり 山
 津追のちるもこれ前付 悠
 山あれまもやとあまみ月くれ 蒼札
 を心ありしやとさほほをく 抱候
 地をれつらる名と地のけて 寿堂
 碧油ねさせも花れおらさき 札
 つらひを思ひの卯ささき あまく 候
 粟れうしれおらささき 耆
 多前若れ藁と離さぬ柳風 札
 境内多し町さりも出ぬ 候
 後そひも入まは子供を言あけ 耆
 漆くふまはれ大層まなり 札
 掃溜へゆらうとさう料理房 候
 初めくとも毛とさくは柳丸 耆
 の梅若れあてまもはぬ柳の月 札

庭石をうつり人のやめたり
四もあし附て愛ひし御人の流
手廻れ花の風鈴のてらる
山掃活のつらあてもあはれなき
春を振りてまゝ門もあぬ

半歌仙

降止しりしは曇のあまなり
葡萄ふはれつまるる葉儀
そぞろ端ののけは端解して
ちよつとさぬるあふれ
物のみ息杖のうらみらん
強ふ理ふれあてしあ側
板とりま板取れつる生編
深へとけしは住む結のて
飛ひれはきお板取れきぬく
衣の袖のつらてまの板

飯

巻

丸

依

巻

而依

沙路

茨山

呂川

柳鳥

金槌

玉凡

赤巻

石

所保戀と平地の程を知らぬ
四柱を中つるまむ表林
長生のりしたさう味の物之けを
月らあつるると板のゆり
落籠る交らぬ籠のちりくと
くらつと通せの給てとまむ
花よりあてするも大枝向し
木の芽をけさる極北日知

半歌仙

拾の地をうけて庭里をり
日々ちりくくと林の門へり
月見あされなりしと秋入て
つらそぬえの湯煙のつる
新の庭はとまて冷き葉葉
河原よりつる葉つき知は
控印す此をまて留すも長此先

鳥付

芝石

慈

山

竟

香

大葉

は

相面

眉山

悠々

西

山

悠

西

枯井よりわらひ村の石付 悠々
 沙のさび水は碧油の^{あま} 悠々
 海燈心とよりくある様 悠々
 子信ありは流星とせむ青月 悠々
 くらわてとまけい初産の^{あま} 悠々
 ちりつとては掃除もまぬ^{あま} 悠々
 鼻血やむまて仰向て^{あま} 悠々
 幸清ありりて^{あま} 悠々
 何事ありや^{あま} 悠々
 手あし門出は^{あま} 悠々
 廁の侍り^{あま} 悠々
 鞆網の柱も^{あま} 悠々
 書^{あま} 悠々
 町筋の中は^{あま} 悠々
 叱^{あま} 悠々
 法連^{あま} 悠々

昔男礼のみ々 悠々

歌仙

昔れ浪連の^{あま} 悠々
 志^{あま} 悠々
 交代の結^{あま} 悠々
 系^{あま} 悠々
 意^{あま} 悠々
 や^{あま} 悠々
 印^{あま} 悠々
 櫛^{あま} 悠々
 新^{あま} 悠々
 山^{あま} 悠々
 誇^{あま} 悠々
 去^{あま} 悠々
 津^{あま} 悠々
 ち^{あま} 悠々

吾如織こゝろたこゝろりり
 先胸こゝろ替こゝろけり
 此内志こゝろあこゝろるこゝろ四こゝろ年こゝろ
 車こゝろ風こゝろのこゝろ由こゝろ情こゝろ
 旅こゝろ傳こゝろとこゝろ流こゝろるこゝろ日こゝろ此こゝろ水こゝろき
 放こゝろ下こゝろ頭こゝろゆこゝろてこゝろくこゝろはこゝろ橋こゝろあこゝろと
 之こゝろあこゝろるこゝろ程こゝろとこゝろぬこゝろをこゝろ揚こゝろやこゝろくこゝろくこゝろ
 ちこゝろろこゝろ子こゝろ親こゝろまこゝろくこゝろくこゝろ投こゝろ出こゝろるこゝろ
 とこゝろここゝろ止こゝろもこゝろ只こゝろまこゝろはこゝろ花こゝろ海こゝろのこゝろ花こゝろ
 更こゝろ三こゝろ海こゝろ一こゝろたこゝろ夕こゝろ羽こゝろ等こゝろ此こゝろ何こゝろ
 風こゝろ相こゝろをこゝろ持こゝろさこゝろくこゝろ魂こゝろをこゝろ抱こゝろ也こゝろ一こゝろ
 妙こゝろ理こゝろくこゝろひこゝろもこゝろ醫こゝろ志こゝろ此こゝろ何こゝろ
 獨こゝろ然こゝろ此こゝろ下こゝろ夜こゝろ程こゝろまこゝろきこゝろ流こゝろ星こゝろ傷こゝろ
 片こゝろそこゝろくこゝろ付こゝろるこゝろくこゝろ月こゝろのこゝろ解こゝろ
 船こゝろ也こゝろもこゝろ秋こゝろのこゝろちこゝろりこゝろきこゝろふこゝろじこゝろ
 ここゝろれこゝろくこゝろのこゝろいこゝろちこゝろるこゝろ葎こゝろのこゝろ衣こゝろ巾こゝろ
 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木

花こゝろのこゝろ聖こゝろ位こゝろ座こゝろ此こゝろ聖こゝろもこゝろ一こゝろつこゝろのこゝろろ
 奇こゝろ色こゝろまこゝろまこゝろれこゝろとこゝろ舞こゝろのこゝろちこゝろまこゝろぬ
 ねこゝろゆこゝろくこゝろくこゝろはこゝろのこゝろ茶こゝろ理こゝろけこゝろのこゝろ程こゝろ眠こゝろき
 控こゝろまこゝろあこゝろるこゝろくこゝろまこゝろるこゝろ一こゝろ次こゝろ吹こゝろ
 散こゝろりこゝろのこゝろ掃こゝろりこゝろまこゝろまこゝろくこゝろまこゝろるこゝろくこゝろりこゝろん
 人こゝろまこゝろやこゝろんこゝろてこゝろ衣こゝろをこゝろ知こゝろるこゝろ抱こゝろ
 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木 宝 梅 木

歌仙

山こゝろちこゝろれこゝろ林こゝろやこゝろ忍こゝろるこゝろくこゝろまこゝろ葉こゝろ大こゝろ根こゝろ
 吾こゝろあこゝろるこゝろ月こゝろのこゝろ影こゝろをこゝろ看こゝろるこゝろ
 深こゝろ壳こゝろれこゝろりこゝろひこゝろてこゝろやこゝろつこゝろとこゝろ少こゝろ出こゝろて
 飯こゝろもこゝろなこゝろるこゝろ止こゝろ木こゝろ端こゝろくこゝろけこゝろるこゝろ
 ざこゝろぶこゝろくこゝろくこゝろとこゝろらこゝろれこゝろふこゝろくこゝろのこゝろ海こゝろのこゝろ
 角こゝろ也こゝろ一こゝろ新こゝろまこゝろくこゝろ起こゝろてこゝろ居こゝろるこゝろ
 借こゝろてこゝろ来こゝろてこゝろ身こゝろ動こゝろちこゝろぬこゝろ木こゝろ深こゝろ淵こゝろ
 何こゝろとこゝろ若こゝろきこゝろもこゝろむこゝろせこゝろりこゝろ卑こゝろ中こゝろ野こゝろ
 美こゝろくこゝろのこゝろ盤こゝろまこゝろまこゝろらこゝろりこゝろとこゝろ席こゝろらこゝろぬこゝろ
 山 宝 梅 山 宝 梅 山 宝 梅 山 宝 梅 山 宝 梅 山 宝 梅 山

社中事のつり此なり海軍
 新よりつらふよりちや入内
 拂賞とそつまうして息きれる
 派まうと此れ此樂うけるん
 言人もあんなに此あんなやうの
 痛とまきれぬ又昔もさ
 暮飯ううてやりうも此れ飯
 ねれぬ病をさるもなをぬ
 さつけりと此れ此村の病也
 急なまらぬやうのぬら
 節りううてそくもこの日如
 正地改めむのさる極楽
 吾作法も此れをさるなりし
 痛と病をさるあんなあの子
 堅き物と深まりきりよ月夜
 早湯鹽とあんなとあんな

石 石

袖もさるつらふよりちや入内
 今法もあんなとあんなあんな
 穀入の是非ともさるうう酒
 是袋ぬきぬらうあんなうう酒
 飲せうう今法をたりにさるうう酒
 あ鉄砲の場あんなにさる
 凌音此裏りさるううううう
 とらふもあんなのさるうう酒
 塩漬とあんなとあんなあんな
 大抵さるううとせはさるうう酒
 提灯此燈もあんなとあんな
 以のりもあんなとあんなあんな
 別法とあんなとあんなあんな
 ふらとあんなとあんなあんな
 即待もさるうう月夜此れあんな
 旁もさるううとせはさるうう酒

石 石

嘗見酒白川 三

十年此處居りあふ友去人 三

さらけ居風下及故の交結 三

嘆むを結ら居らるの如き 三

陽炎 升 曉天 三

和漢一折

西情を重く結てさるる柳うけ 三

遠 常 吐 玉 新 友思

春 山 合 笑 淡 旅

春 露 水 也 也 也 離 是 家 思

日月を名をさるる人々 思

碎 甜 忘 冷 塵 思

楊州の柳を結る男とと 三

提打さけてさる此家合 思

春 惆 悵 年 過 思

倚 物 老 壽 真 思

妾 命 為 君 擲 三

八 島 浦 此 至 治 三 思

流 弓 鴨 川 月 三 思

秋 風 空 々 々 々 琴 乃 者 三 思

冬 上 結 家 暖 さ ら 々 切 切 三 思

墨 汁 の 白 白 々 昏 の 門 三 思

忠 切 奏 花 樹 三 思

謀 首 伏 物 春 三 思

和漢

水 仙 也 壙 也 籠 也 自 此 居 三 思

霜 流 竹 露 圓 三 思

等 結 せ ぬ 事 々 々 々 々 々 々 三 思

寸 の ち ろ け 々 々 々 三 思

月 分 仲 秋 夜 三 思

霧 混 物 暮 烟 三 思

若此衣と命とあそむむ 旅
 空、陽、故、御、地、の
 心、遊、各、里、天、の
 風、呂、沸、と、あ、と、あ、の、境、と、の
 思、頭、岡、杜、結、の
 五、的、の、ま、あ、く、老、の、の、入、の
 懐、秋、田、家、他、の
 愛、菊、朝、門、士、の
 十、七、は、花、の、あ、を、を、を、の
 振、袖、の、す、わ、わ、の、魔、の、ま、は、風、の
 伴、壇、大、井、門、の
 折、指、算、月、日、の
 死、盃、秋、延、年、の
 定、め、て、い、う、を、せ、し、世、の、松、の
 さ、つ、を、り、た、る、夕、立、は、後、の
 急、を、り、た、る、と、あ、を、輝、ら、ぬ、の

國、籠、閃、鈴、連、の
 人、柄、も、却、ち、別、な、に、ね、ね、や、の
 驚、情、橋、下、石、の
 償、力、路、上、軌、の
 雨、晴、律、聲、解、の
 菅、公、此、の、志、の、ふ、在、の、月、の
 菱、母、の、座、の、哀、あ、い、の
 旅、の、ま、極、し、ま、お、ひ、つ、そ、り、と、の
 峯、曝、風、高、島、の
 道、後、時、頭、美、の
 奇、鏡、の、出、来、一、言、の、お、殿、の
 暮、雲、花、所、く、の
 空、雲、き、き、と、り、物、を、た、と、の

○和歌の和句と韻と揃す様和の和句も
 韻とあり平仄の和歌和句も和句も
 也つても作例とあつた和句も

漢漢和の例に在り集と云書と百納類を
 あり漢人の仁言を云云爲松文の銀色銀語
 言方注所考此語毎くして他回附と名
 存悉く見えたりと後芭蕉と云乎此和
 澤を云ありて云集伊ま句の初まんえと
 里又芥竹集れ中より大松居の初澤一初夢
 松年を云れ澤和あり依て知るべし

新選
 俳諧

明治歳時記萩草卷之下 終

鶯の啼き暮の涼の
 葉の事は何もあはれ
 地あるも是れは
 主人の心あり
 こといふも梅の
 梅子御階歩年
 ともは春の去来

諸君の懇き誠今の世に
 朽衰して頼りぬめさるる
 選り進めぬるに實に
 明治中の偉業も云ふま
 けなき事ありしを思ひて
 士林又環をる松本城
 後や此の治承の地は錦

松ヶ世に廣く榮えを
 え給ふにわがもの令し給
 事なるに此のさうふふ時
 しあ給ふを計理

明治三五の御事

東のまが菊
のちの
 叙



明治十四年十月十八日版權免許
同 十五年三月 刻成

著者 東京府平民 三森幹雄

日本橋区蛸壳町
二丁目四番地

出版人 東京府平民 須原鐵二

日本橋区西河岸町
十二番地

發兌 東京 稲田佐兵衛

全 山中市兵衛

全 小林喜右工門

全 高木和助

全 旭昇堂

書林

大坂 前川善兵衛



